

## 相原さんの「農業一般」について

佐々木 享

### 1

編集部から相原さんの『『農業一般』の自主編成』というみじかい文章と、『農業一般』と題して相原さんがテキストとして使ったプリント、それに同じく授業に使われた若干のプリントを渡され、感想を求められた。私は、農学や農業経済学に関してはまったく勉強したことがないので、感想を書く適任者とはおもえない。重ねて尋ねたところ、技術教育としての問題を指摘してみたいとのこと。それで私に感想を求められた理由を納得したわけではないが、専門外の者が感想をのべるのもムダではない筈だと考えて、若干の感想を記してみる。

### 2

相原さんの「農業一般」の実践は、相原さんが働いている都立農林高校で成り立っているものだ。東京の郊外にある都立農林高校という職業高校がどういう位置におかれているかについて、相原さんはほんの僅かしか書いていない。いまから20年以上も前、私が学生の頃にかいまみた青梅はまったくの農村だった。その青梅にある農林高校で、「生徒の家庭で多少とも農業を営んでいるのはせいぜい二割前後、園芸科40人のうち農業自営を予定する者は年に一人いるかないかというところ」まで、青梅は変わった。奥多摩が変わり、農林高校に入学してくる生徒が変わってきたなかで、農林高校の、相原さんたちの「農業一般」が成り立っている。

中学校の「的確な進路指導」によって、「昔だったらとても高校までは来なかった筈の子供達がみんな来るようになったという現実

」、  
「将来農林業に従事することはない」という生徒達、「ご多聞にもれぬ非行、怠学、低学力」という現実、近年のどこの職業高校、どこの農業科でもみられる珍しくない風景である。いや珍しくないだけでなく、地域が東京だけに、その非行、怠学、低学力という事態は予想をはるかに上まわる程に深刻である。

しかし、この都立農林高校には、他の職業学校にはなかなかないものがある。学力が低く、徹底して怠けぐせがつき、教師にも生徒にも平気で暴力をふるう生徒がおり、大小の非行がまるで日常茶飯事になっている学校であるが、この学校には、この非行、怠学、低学力に正面から立ちむかい格闘している教師が少なくないのである。ミックス・ホームムも、「農業一般」や「家庭一般」もその格闘と討論のなかから生みだされてきたものである。相原さんはこうした経過についてはほとんど何も記していない。「農業一般」の実践をとりあげて、自主編成の授業の問題としてそれだけを議論することは勿論重要であるし必要なことだが、都立農林高校の実践については、その背景にある教師達と生徒達のとりにくみについても理解することが必要であるようにおもわれる。そうはいっても、職場の教師達のすべてが集団化されているわけではなく、「農業課程の教員の中で組合教研や民間教育研究に目を向ける者は五指に足りない」という状況も、どこにでもある風景であって、その意味でなら、都立農林もけっして特別な学校ではない。(職場の状況については、これ以上はふれない。岩淵国雄『高校生

の山河——生徒自治に挑んだ農林高校の記録』1976年、高校生文化研究会刊、を参照して欲しい。同会の住所は、〒101 東京都千代田区猿樂町2-3-1 振替口座東京6-18956 本の定価は780円、送料は120円である。）

### 3

まず、都立農林の「農業一般」の位置づけについて。「農業一般」という科目は、相原さんもいのように現行の高等学校学習指導要領にのっており、検定教科書も発行されている。だから、「農業一般」の科目をとり入れること自体は、いわゆる自主編成とはいえない。しかし、学習指導要領では、この「農業一般」は「農業科、園芸科および畜産科以外の学科において履修させるものである」とされている。都立農林では、園芸科の生徒もこれを学ぶのである。相原さんは「ミックス・ホームルームを教科の面から成立させる要素として、また“総合技術教育”のイメージを頭の中で追いながら実施した」と簡潔にのべているのみであるが、あえてこういう科目を採用するについては、職員会議などで提案理由も説明され、討論もなされたであろうから、それらを紹介して欲しかったとおもう。それにしても、ミックス・ホームルームを実質的に成立させるためという指摘は重要だとおもう。近年、ミックス・ホームルーム編成が注目されるようになってきているが、いわゆる生活指導面だけからこれを採用しようとする場合も少なくなく、そうした場合のミックス・ホームルームは、極端にいえば非行の分散化、それに伴うクラス担任の負担の均等化ぐらいの意味しかもちあわせないというようなことになりかねないからである。

「“総合技術教育”のイメージを頭の中で追いながら」というのはわからない。相原さん(たち)が考えたであろうことを想像しても仕方がないから、私の意見を書く。

農林高校もそうのようであるが、最近の職

業科では、はじめからその学科を志望してくるという生徒はむしろ少ない。そういう生徒達に、はじめからその学科を志望してきたかかっての生徒達にたいするのと全く同様に、特別なオリエンテーションもなしに、この学校・この学科に入学したからにはこの学科目を勉強するのは当然なんだというやり方で専門科目の授業をすすめたのでは、生徒たちが専門科目の授業にはじめから学習意欲をあまり持たないというのも、当然すぎることなのではないか、と私にはおもわれるのである。どの学科でもいえることかどうか、またいつでもいえることかどうかはわからないが、昨今では、多くの場合、専門科目の授業をはじめするには、かなりていねいなオリエンテーションが必要なのではないかとおもわれるのである。それは、勿論画一的なものである必要はないし、また画一的なものではあまり意味がないことになろう。農業のこと、とりわけ日本の農業の特殊性について何も知らない高校生にいきなり専門的な科目の授業をはじめることによって生まれるであろう専門科目にたいする違和感、緊張感を、相原さんたちのこの科目の授業は、解きほぐすという重要な役割をはたしているようにおもうのである。今次改訂でつくられる「基礎農業」なる科目は、むしろ農業関係の学科に一律に課すということにねらいがあるようであり、そして一律に課そうとするところに思考の硬直性がみられるのである。この種の科目こそは、相原さんたちの実践のように、学校・学科のおかれた位置や生徒の実状にそくして展開してこそ意味があるとおもうのである。

### 4

相原さんの「農業一般」のテキストについて。相原さんの授業をみているわけではなく、授業記録もないので、テキストについて感想をのべる。

相原さんの「農業一般」のテキストは月並のものではない。恐らく授業も成功している

のだとおもわれるが、そう感じさせるほどテキストが生き生きと感じられるのは、相原さんが、自分が語ろうとする農業を日本の農業一般でなく、東京の農業とりわけ青梅をふくむ奥多摩の農業に焦点を当てていることと、実習をとり入れているからであろう。昨今の高校生は地域を知らない。相原さんも指摘しているが、生徒達は農村地帯に住んでいてもたんに農業を知らないだけでなく、自分達の暮している地域の農業を知らない。地域の人、学校も、教科書も教えようとはしていないからである。実際のところをいえば、教師だって、格別に知ろうと努力する人でない限りは、地域を知らないのである。相原さん(たち)が、地域を学ぶためにどのような努力をしたのかは、このテキストだけではわからない。前掲の岩淵国雄『高校生の山河』によると、都立農林高校には、かなりつつ込んで地域の問題を調べたりする教師が幾人かいるらしいから、相原さんはそういう人達と討論しているのかも知れない。少しく気ままなことを言わせてもらえば、もっと強く地域に焦点を合わせてもよかったのではないかとさえ、私はおもう。

しかし、教材の選択と排列はよくくふうされており、相原さんの教材研究に払った努力が並々でないことをしめしている。参考のために、「農業一般」の検定教科書(実教出版)の目次をつぎに掲げる。

#### 第1章 わが国の農業

1. わが国農業の特色
2. わが国農業の環境
3. わが国農業の動向
4. 農業政策とその成果

#### 第2章 作物

1. 稲作
2. 畑作

#### 第3章 園芸

1. 野菜園芸
2. 果樹園芸
3. 草花園芸
4. 庭や緑地と花壇

#### 第4章 畜産

1. 養鶏
2. 養豚
3. 酪農

#### 第5章 生産物の流通と農業経営

1. 生産の費用と生産物の流通
2. 農業経営とその改善

相原さんの教材排列をみると、相原さんの書きぶりだと社会科学的側面に傾斜しているという批判もあるらしいが、たちいってみると、けっしてへたくそな農業史の講義にしてしまうのではなく、土壌のこと、光合成のこと、日本農業の特殊性、日本の食糧問題、流通問題、そして実習が適宜に配分されている点にくふうがある。しばしば、いわゆる自主編成教材がうまくいなくなる理由のひとつは、あれもこれもとつめ込みたくなる点にあるが、相原さんのテキストにはその難点がない。教材研究は、選び出すのもむづかしいが、いったん選び出したものを捨てるのはいっそうむづかしいものである。その点で成功しているのは、相原さんの教材研究に払った努力が並大抵のものでなかったことをしめしている。

欲ばっていえば、うしろの方の、「農地の制度の歴史」のところは、うまくいったのだろうかと気になる点である。地代という経済学のなかでも農業基本法体制などよりもずっと高度に抽象的な、しかも重要なはんちゅうを、短時間に教えようとすればつめ込みになるに決っているし、よほどうまく扱っても日本史で扱う程度にしかならないのではないかと気になるのである。日本史の授業が古代からはじまって明治維新に到着しないからというのであれば、それはむしろ日本史の授業で解決すべき問題だとおもうのである。「資本主義的農業」の説明がすっきりせず、たんなる大規模農業であるかのような印象を与えるのは、結局のところは、「地代」はんちゅうがすっきりしていないからなのではないだろうか。こういうことを考えると、三年生にこういう科目があったらいいという相原さんの感懐に同感である。

はじめにも記したように、何しろ私は専門

外なので、たち入ったことはいえないのだが、疑問だけ提示しておきたい。

私の印象では、社会科学的側面に偏しているとはおもえない。問題となるのは、むしろ社会科学的にみて、正確なのか、あるいは正しく事実を表現しているか、が問題となるのではないかとも思う。その意味で問題が感じられるひとつは、産業分類に関して、第1次、第2次、第3次というクラークの分類にこだわっておられる点である。多くの教科書にものっているし、利用できる統計が大いこうなっているから、説明にとり入れるのはやむを得ないとも思うが、経済学では生産財生産部門と、消費財生産部門に分ける考え方があることにおられる必要があったのではないかとおもっているのである。たとえば、40ページに、「高度経済成長」政策は「工業生産の拡大強化による資本の蓄積（というむづかしい、しかし正確な用語がでてくる）を目的とする」とあるが、二部門分割の考え方がないと、「高度経済成長」政策は、生産財生産部門への設

備投資によって蓄積基礎の拡大強化をはかったところに重要な特質があったことを理解しにくいのではないかともおられるのである。

こまかなことでいえば、米の「価格は毎年米価審議会が立案する」（28ページ）という記述は気にかかる。これでは、米価が何によって決められているかという本質がわからなくなるおそれがあるとおもわれるからである。「農業は、第二次、第三次産業に対して、労働力を提供する」（26ページ）という記述は、産業分類の問題を別としても不正確というべきである。農業という産業に労働力供給の機能があるわけではないのだから、42ページに、「農村は、労働力と兵員の供給源となった」とある方が正確であろう。

的確なことを指摘することができなかったが、これからは「基礎農学」というような科目として、類似の授業があちこちで始められることが予測されるので、学ぶべきものの多い実践であるといえよう。（名古屋大学）

## 技術教育研究会の入会ご案内

技術教育の民主的発展のために、ともに研究と運動を発展させましょう

- ☆ 小学校の図工科、中学校の技術科、高校の職業関係学科、職業訓練校などさまざまな分野で技術教育にたずさわっておられるみなさん。
- ☆ 技術教育をめぐる諸問題に関心をもっておられるみなさん。
- ☆ 技術教育や職業訓練を民主主義的に発展させることをねがっているみなさん。  
技術教育研究会にお入りくださいませんか。  
技術教育研究会は、技術教育を民主主義的で豊かな内容のあるものに発展させるための諸問題を研究する人々が自主的に集っている全国的な研究団体です。会員には、小・中・高校の技術教育関係の教師、研究者、職業訓練校の指導員などがいます。こういう人々が集って、規約と活動方針にもとづいて、技術教育の諸

分野の現状や問題点を分析し、実践上の諸問題の解明につとめ、また、国内や諸外国のすぐれた経験に学ぶ努力をしているのです。

恒常的な活動としては、年9回の「会報」を発行して研究と実践を交流し、年1回（従来は8月）の大会や会宿研究会を開催してきました。また、一部の地域に支部が置かれ定期的に研究活動も進められています。研究成果をひろめるために雑誌「技術教育研究」を刊行しています（会費と別に実費配布します）。

- ☆ 私たちは志を同じくする方が入会してくださることを歓迎しています。入会手続は申し込み書に会費年額2,000円をそえて申し込んでくださるだけでよいのです。
- ☆ ともに、日本の技術教育の民主主義的な発展のためにがんばりましょう。